

「息子と鬼滅」

夏休みに見た映画をもう一度見たいと言い出した息子と男 2 人で映画「鬼滅の刃～無限城編」を観てきた高野です。（私は初鑑賞）

夏休みからロングランするだけあって、アニメながら見ごたえのある作品でした。
簡単に言うと「鬼退治」の話なのですが、現代社会を映し出した作品になっています。

というのも、鬼たちは元々は人間であり、不平不満（絶望や孤独、嫉妬、承認欲求）から鬼になっていくのです。承認欲求に囚われた姿は、現代の“自己肯定感の低い人間”の投影のように思えます。

中でもアカザという鬼が生まれたエピソードは、ホントに涙もので、横で観てた息子からも「お父さんも涙目やったね」と笑われました。

アカザはもともとハクジという名の人間でした。貧困な家庭に生まれ、病弱な親を看病するために盗みを働いては、罰せられる毎日。親の死後、孤児になるも、ある武道家に引き取られて、武術を磨きます。そしてその武道家の娘と婚約し、やっとこれから幸せになれると思えた矢先に、他の道場の妬みから武道家と娘（婚約者）が毒殺されてしまうのです。ハクジは復讐して回り、その姿を見ていた鬼の親分から見込まれて鬼にされてしまうのです。（そりゃ鬼になるわなんて同情もしました。）

一方で、炭治郎（主人公）たちは、鬼を憎みながらも「もともと人だった」ことを知っていて、単に敵を斬るのではなく、“哀れみ”をもって戦います。そのせいか主人公が勝っても何故かスッキリとは喜べません。自分自身の日頃のわがままぶりを考えさせられるからでしょうか。

実は、この映画を観る前のこと。時間に余裕があったのでポップコーンを買おうと並んでました。ところが、私たちの列の店員さんの仕事があまりに遅く、開演時間が迫ってもぜんぜん前に進みません。そこで息子だけ先に映画館に入れて私一人で並ぶことに。やっとの思いで私が入場した時には、映画も始まっていました。イライラ、マックスで身がかがめながら入場すると、今度は暗い映画館の中で、コーラをこぼしてしまい、またまた不機嫌に。

映画を観終わった時、俺も立派な鬼になりそうだなと妙に反省した次第です。

「不足不満の心は、人を鬼するんだぞ～。相手を思いやる気持ちを忘れるなよ」と炭治郎に教えられた気がします。

「鬼滅の刃～無限城編」は人間性を問い直す“現代の寓話”として心に残りました。